【連載】

『凛々たる人生』

― 志を貫いた先人の姿 ―

【第十二回】日本に西洋医学を紹介した

杉田玄白

東京大学名誉教授　月尾嘉男

西欧がもたらした文明

ポルトガルは現在でこそヨーロッパで目立たない国家ですが、一五世紀から一六世紀にかけてはスペインとともに世界に進出した二大大国でした。その海外発展の契機となったのが、一三八五年に成立したアヴィス王朝の初代国王ジョアン一世の三男ドン・エンリケ王子の活躍です。エンリケはポルトガルを海洋王国にすることを目標に、一四一六年に国土の最南西端にあるサグレスという寒村に「王子の村落」という拠点を建設します。

ここでは当時の貴重な資料であった世界地図の収集、造船や気象観測の技術開発、船乗りの育成などを実施し、着々と世界進出の準

備をします。そして一四一九年から当時の西欧社会では未知の海域であったアフリカ大陸西岸の探検に次々と艦隊を派遣します。その結果、大陸の沖合にあるマデイラ諸島、アゾレス諸島、カーボヴェルデ諸島などを発見、さらに八八年には大陸南端の喜望峰に到達、九八年にはインドまでの航海に成功します。

一方、コロンブスのアメリカ大陸発見を支援したスペインとは発見した陸地の領有が問題となります。そこで一四九四年にローマ教皇アレクサンデル六世の仲介によって成立したトルデシリャス条約、さらには一五二九年のサラゴサ条約によって両国は世界を二分し、アフリカ大陸からアジア一帯はポルトガルの圏域とされ、ポルトガルの帆船がアフリカ大陸の南端を回遊してアジアに登場するようになりました（図1）。

そのような背景から、一五四三年にポルトガルの船乗りが中国の帆船に乗船して鹿児島の種子島に到来し、鉄砲という当時の最新兵器を紹介しました。さらに六年が経過した四九年にはキリスト教を世界に布教する目的で創設されたイエズス会の創設メンバーの一人であるフランシスコ・ザビエルが薩摩半島の坊津に到来し、薩摩の守護大名島津貴久に謁見して布教を許可されますが、様々な事情があって中国に移動し、そこで死亡します。

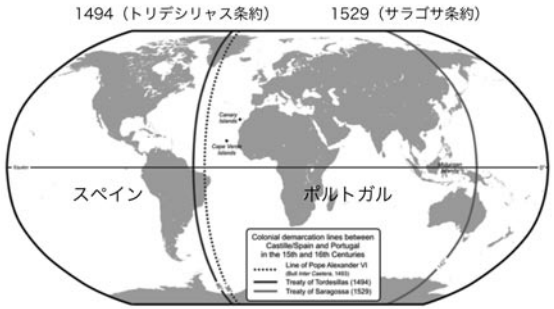

図1　トルデシリャス条約とサラゴサ条約

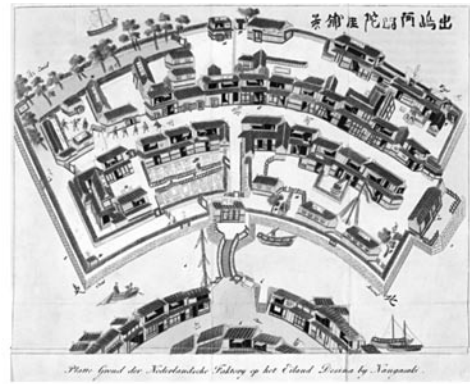

図2　出島

このような経緯があり、戦国時代から江戸時代初期にかけてはポルトガルが日本で勢力を拡大しますが、高山右近、小西行長などに代表されるキリシタン大名が登場し、キリスト教は仏教や神道の勢力から邪教とされ、江戸時代になった一六一三年には幕府により禁教とされました。しかし、外国との物品の交易や最新の情報の入手は幕府にとっても必要であり、長崎港内に出島を造成してオランダ人を居住させ窓口としました（図2）。

『ターヘル・アナトミア』の衝撃

そのような状況において、若狭国小浜藩の医者で本草学者の中川淳庵（一七三九―八六）がオランダ商館からオランダ語医学書『ターヘル・アナトミア』を借用し、故郷の先輩で医者の杉田玄白を訪問したところ、文章は理解できないものの精密な図版に驚嘆し、藩費で購入することにしました。一方、豊前国中津藩の藩医で江戸幕府の幕臣でもある前野良沢（一七二三―一八〇三）も長崎に留学したときに入手していました。

これはドイツの医師ヨハン・アダム・クルムスが執筆し、一七二二年に出版された解剖学書『アナトミッシェ・タベレン』のオランダ語訳『ターヘル・アナトミア』（一七三四）です（図3）。そこで杉田玄白、中川淳庵、前野良沢の三人は図書を持参して現在の東京都荒川区南千住にあった千寿骨ケ原刑場に出向き、そこで処刑された罪人の死体の内臓と見比べてみると、図版が大変に正確であることに驚嘆しました。

図3『ターヘル・アナトミア』

当時の日本の医学の手本となっていたのは『傷寒論』『小品方』『千金方』『医心方』など歴史のある中国の書籍で、数百種類が渡来しており、かなりは翻訳されて出版されていました。その代表である『神農本草経』は数千年前からの伝統医学を根拠にした内容でしたが、『ターヘル・アナトミア』は異質の内容でした。文章は理解できないものの、図版に感銘した三人は翻訳して内容を理解しようと決意します。

しかし、玄白と淳庵はオランダ語が理解できず、良沢は多少の知識はあるものの翻訳できるほどの十分な語彙がなく、さらに幕府のオランダ語の通訳は長崎に滞在しているので相談することもできず、一七七一（明和八）年から暗号を解読するような状態で翻訳を開始しました。四年が経過した七四（安永三）年にようやく翻訳が完成し、『解体新書』と名付けられた訳書は、玄白の友人で将軍の侍医でもある桂川甫三から第一〇代将軍徳川家

治に献上されました（図4）。

優秀な藩医であった玄白

ここまでは歴史的翻訳書である『解体新書』が日本で翻訳されるまでの経緯を説明してきましたが、以下は杉田玄白について紹介します。玄白は若狭国小浜藩の藩医である杉田玄甫（甫仙）の三男として一七三三（享保一八）年に小浜藩酒井家の江戸屋敷で誕生しました。大変な難産であり母親は出産のときに死去しています。八歳になった四〇（元文五）年に一家は小浜に帰郷し、少年時代の約五年間を一族の出身の土地で生活します。

一七四五（延享二）年に父親が藩命で江戸に転勤になったため一緒に移動し、一七歳に

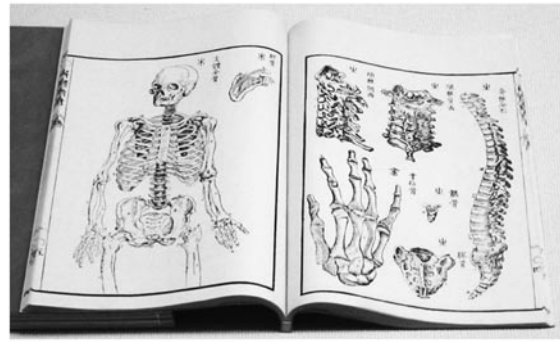

図4『解体新書』

杉田玄白（1733-1817）

なった四九（寛延二）年に幕府の医師である西玄哲からオランダの外科の技術を習得します。そして五三（宝暦三）年に江戸で小浜藩医として召抱えられました。しかし藩医としてだけではなく、五七（宝暦七）年からは日本橋で開業もし、平賀源内や田村藍水が中心となって本郷湯島で開催した物産会にも参加しています。

これは全国各藩の特産の物品を出品してもらい展示する催事で、大変な盛況になり、一七五七年から六二（宝暦一二）年までに五回も開催されました。この六二年の会場には全国から送付された一三〇〇種類以上の物産が展示され、平賀源内は翌年、それらの物産から三六〇種を選定し、『物類品隲』という図入りの書籍として出版し、ベストセラーになっています。玄白が医学だけではなく様々な分野に関心があったことを証明しています。

一七七六（安永五）年になり、それまで生活していた小浜藩中屋敷から近隣の旗本の屋敷に移動し、そこで開業するとともに「天真楼」と名付けた私塾を開設し、弟子を育成します。玄白の医師としての手腕は評判で、とりわけ外科の治療に腕前を発揮し、江戸一番の医師として有名になります。毎年千人以上の患者を治療しており、柴野栗山という学者は「当代江戸一番の医師で、治療してもらえば安心である」と記録しています。

江戸時代の医師の生活

一八〇五（文化二）年には第一一代将軍徳川家斉に医薬を献上するほど名医として評判でしたが、七五歳になった〇七（文化四）年に息子の伯元に相続して隠居しました。そして八三歳になった一五（文化一二）年に『解

図5『蘭学事始』

体新書』を翻訳した時代を正確に後世に伝達するため『蘭学事始』を執筆します。これは自筆の原本と大槻玄沢に寄贈した写本の二部のみでしたが、六九（明治二）年に福沢諭吉などにより出版されています（図5）。

内容は戦国時代末期にポルトガルやオランダの帆船が到来して西洋社会との接触が開始された時期から出発し、日本でオランダの医学が導入されはじめた時期の様子、そして『ターヘル・アナトミア』を苦労して翻訳した経緯、さらに蘭学の導入に貢献した平賀源内、桂川甫周、大槻玄沢や、事情があって『解体新書』の訳者として名前が記載されなかった前野良沢の紹介などが記載されており、貴重な記録になっています。

玄白は多数の著書を執筆していますが、その一冊に自身の後半の人生を記録した著書があります。それによって江戸時代の医師はどのように診察や治療をしていたかを紹介します。当時としては普通ですが、夜明けとともに起床して家族とともに食事をし、藩医であったため一定の間隔で藩邸に伺候して藩主や家族の診察をしています。また毎月一回は医師仲間の「病論会」に出席して最新の医療知識の交換もしています。

これ以外は本業の患者の診断や治療をしますが、現在のように患者が医院に来訪するのではなく、患者の自宅を訪問する形式で治療をしていました。玄白は名医として有名であったため、毎年、江戸の東側一帯の五〇〇ケ所以上の場所を訪問しています。それぞれの地域には何人かの患者がいますから千人単位の患者を対象にしていたことになります。駕籠で移動していますが、大変な労力を必要としていました。

玄白の現役時代の江戸時代末期に江戸には何人くらいの医師が存在していたかは正確には不明ですが、約二万八〇〇〇人と推定され、人口が約一〇〇万人でしたから、住民三五人あたり一人の医師が存在していたことになります。現在の東京の医師と歯科医師の合計は六万五〇〇〇人で人口が一四〇〇万人ですから医師一人あたり二一五人の住民になり、江戸時代には人口あたり六倍以上の医師が存在していたことになります。

どの程度の収入があったかは明確ではありませんが、玄白は藩医でもあったので高額の収入があり、年間七二〇両程度であったようです。『椿説弓張月』や『南総里見八犬伝』で有名な流行作家の滝沢馬琴の年収が三六両と推定されていますから、現在も江戸時代も医師は収入という視点では恩恵のあった仕事ということになります。このような下世話な話題ではなく、診療で多忙な時期に難解な翻訳に挑戦した勇気こそ、玄白の真価です。

つきおｋ　よしお
一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実。
趣味はカヤックとクロスカントリースキー。
著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叡智』『転換日本』『清々しき人々』『凛々たる人生』『爽快なる人生』など多数。